TinplateKinght

遠璃　須賀利

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＴｉｎｐｌａｔｅＫｉｎｇｈｔ

【Ｎコード】
Ｎ１０３８Ｊ

【作者名】
遠璃　須賀利

【あらすじ】
２０２４年、混迷続く中東某国。第３９歩兵大隊は長引く紛争に辟易していた。
現実の社会問題をモチーフとしたハードサスペンス

／／ Prologue 8／24／2024 14：30

＞i3530－587＜

「ＲｏｍｅｏＰａＰａよりＥｘｏｓ各機、ステータス報告せよ」
『こちらＲｏｍｅｏ１１、システムオールグリーン。アンカー正常』
『Ｒｏｍｅｏ１２、オールグリーン、いつでも降下可能ですぜ』
デジタル無線特有の電子音が混ざる交信、高機動兵員輸送車（EFV）が奏でる古めかしいエンジンのリズムの中で、ウィンタースは初めての実戦にやや興奮気味な声で続けた。
「よし。事前のブリーフィング通りだ。気楽にやれ」
『言ってくれますね中尉。対戦車擲弾食らったら、いくらコイツでもおシャカでしょ』
「オマエらの腕を信用している。今回の作戦の要だ。泣き言は生きて帰ってからにしろ」
『了解（Roger That）』
Ｅｘｏｓ１番機、リプトンが半ば投げやりな態度で了解の合図を送った。
『ケリー、心配すんなって。任務はたったの３０分。お前が早くやりゃそれだけ早く仕事が終わるってもんさ』
２番機、ウェブスターが茶々を入れる。いつもこの二人は訓練中に軽口をたたき合って、最新兵器を預けられた特技下士官に見えない
「慎重に扱えよ、五百万ドルもする高価なオモチャだ」
「そんな事言ってちゃ前線になんか出れませんぜ？中尉殿」
「……よかろう。スピアーズ、後続の多用途装輪車両（HMMWV）は？」
「リンク、ＧＰＳ共に正常です。発見された形跡はありません」
小隊副官であるスピアーズ少尉は明朗に答えた。
「しかし、中尉」
「なんだ」

「私が口をはさむことではないんでしょうが、今回の作戦、たった一個小隊の投入だなんて……」
「上の方はオモチャの利用価値を探りたいんだろう。俺らは与えられた仕事をこなすだけだ」
敵対勢力の予想戦力はほぼ同等。通常の作戦では少なすぎる人員だった。
「人が足りない分はあのブリキの騎士様に頑張ってもらうさ」

『こちらＳｕｐｅｒ２１、降下２分前』
ウィンタースの車両部隊を後方から追うＵＨ－２０ナイトレイブン輸送ヘリに吊されてた２体の甲冑は、従来の歩兵運用体系を刷新する目論見で開発された。
全高２．３ｍ、重量１８００ｋｇ、高速展開用脚部クライヤーホイール、５．５６ｍｍ機銃と４０ｍｍ対戦車榴弾砲を装備し、最厚部４０ｍｍのアルミ複合装甲を施した、いわば個人用簡易戦車と呼べるものだ。
小口径弾はもとより、１２．７ｍｍクラスの対物弾に対してもある程度の防御力を持ちながら、市街戦闘や森林戦闘における歩兵行軍と同程度に行動できるよう設計されている。

『Ｓｕｐｅｒ２１、レーダーアラート』
事前調査ではレーダー施設は発見されなかったはず、とウィンタースは頭の中で反復した。輸送ヘリはウィンタースの車両部隊を跨いで作戦地域にさしかかっていた。
「想定内だ。予定通り降下させろ。できるか？」
『―もちろんです《Ａｆｆｉｒｍａｔｉｖｅ》』
「よし。カウントダウン任せる。各機、すっ転ぶなよ」
『５……４……３……２……１……降下（Ｍａｒｋ）』
甲冑の肩に掛かっていたアンカーが低空で解き放され、後方２番機が投下された。既に脚部クライヤーホイールが降ろされ、投下の３

秒後には接地していた。
がこっという鈍い音を立ててアブソーバーが軋み、多少バランスを崩しながら体勢を立て直す。ホイールの轍が緩やかな曲線を描いた。続いて先頭１番機も降下。ほとんどバランスを崩すことなく走行体勢に入った。
ウェブスターは目前の１番機の降下を確認すると無線を入れた。
『こちらＲｏｍｅｏ１２、降下完了、作戦地域に向かいます』
「そちらの作戦はあくまで陽動だ。深入りはするなよ」
『Ｒｏｇｅｒ　ｔｈａｔ』
通信を終えたウィンタースは手持ちの小銃に弾倉を詰め込み、コッキングレバーの動作具合を確かめた。
「さあ、我々も持ち場に到着するぞ。各自装填確認！」
「装填！」
銘々のかけ声で次々と小銃に装填される。
ウィンタースを乗せた車両部隊は、市街地を迂回するルートに向かっていた。

／／　８／８／２０２４　９：００

「名前は？」
「オキーフ」
「ファーストネーム。登録番号も」
「パトリック、パトリック・オキーフ。１０２－１６７－９１８２」
また大したヒヨッコが来たもんだと、リーブゴット特技伍長は舌打ちをした。
冷房が効いた大隊執務室、上官たちは出払っている。午前中は静かに過ごしたかったが配属手続き業務を任されている身で、贅沢も言ってはいられない。目の前の新兵は、まだあどけなさが残る少年ではないか。
「歳は？」
「１９です」
「志願か」
「はい」
「物好きだな」
時折こういった輩が配属されてくる。
「訓練期間は」
「４ヶ月です」
「ハイスクール出たばかりか。どこの生まれだ？」
「メリーランド州です」
「偶然だな。俺もメリーランドだ。メリーランドのどこだ？」
「ゲイザースバーグ」
「俺はボルティモアだ。ゲイザースバーグか。いいところだな」
「ありがとうございます」
実際にリーブゴットはその土地にそれほど馴染みがあるわけではなかったが、適当な相づちを打っては新兵の緊張をほぐすのは上官の役目、形ばかりのケアだとリーブゴットは心得ていた。下手に慣れ

慣れしくする必要はない。渡されたＩＤカードと照合し、登録はほどなく完了した。
「第３９歩兵大隊へようこそ。まずは配属先の小隊長に会っておけ。ウィンタース中尉だ」
「Ｙｅｓ　Ｓｉｒ」
「購買課《ＰＸ》を過ぎて左側。Ｒ１０１で射撃訓練をしている。行ってこい」
「あの、質問はよろしいですか」
「なんだ」
唐突な質問は毎度のこと事。新兵から聞く定番だ。
「戦闘は……あるのですか？」
「わからん。そんな事は政治屋にでも聞いてみろ」
「……わかりました」
「あまり逸るな。お前のような奴が戦闘で足を引っ張るんだよ」
登録作業が終わった後も、この新兵はそわそわと落ち着かなかった。
「伍長殿は、実戦を経験したことは」
「無い。俺は事務屋だ。お前のような奴を登録抹消したことは何度かある」
「登録抹消？」
「死んだってことさ。データベースに死んだ場所と死因、ＫＩＡのチェックを入れる。ここじゃあ、まだ死んだ奴を処理してないけどな。下手に現地語ができると、この国の色々な場所に引っ張って行かれる」
リーブゴットは右詰の文字列に埋まったパシュトー語の紙切れを一枚ひらつかせて見せる。死んだ奴を処理、という言葉がオキーフの心に引っかかった。
「読めるか？」
「……いいえ」
「戦争だっていっても、現地じゃほとんどデスクワークだ。たまったもんじゃない」

「……いつか、前線で活躍できるといいですね」
「死にたくもないけどな。そら、話が長すぎだ。さっさと行け」
「Ｙｅｓ　Ｓｉｒ」
少年はたどたどしく荷物をまとめると執務室を後にした。

乾い銃声が続けざまに響く。１０名ほどの同僚が砂漠の砂を掘り起こした簡易射撃訓練場で腕を磨いていた。
「中尉！ウインタース中尉！」
オキーフは大声で叫ぶが、銃声にかき消されてどうやら届いてないようだ。
仕方がないので音が静まるのを待っていると、唐突に後ろから肩を叩かれた。
「オキーフ二等兵か？」「Ｙｅｓ　Ｓｉｒ」
大柄の兵士がそこに立っていた。すかさず敬礼を返す。
「中尉はここには来てねえ。中隊長に呼ばれてな。俺はお前のお守りを仰せつかったランドルマンだ」
新兵は、差し出された大きな手に戸惑った。
「握手だよ。ここじゃあ上も下も大して気にしねえ。仲良くやろうぜ」
階級章は1等軍曹。先ほどの冷たい感じの伍長とは違って、気さくな人物に思えた。その雰囲気はオキーフを少し安心させたが、差し出された手を握ると万力で締め上げられるかのようだった。軍曹は握った手を振り回し、歓迎の意を表した。
「パトリック・オキーフ二等兵です。よろしくお願いします、軍曹……殿」
握手の苦痛で上擦った声になる。軍曹はとくに気にした様子もない。
「みんなからは『ブル』って呼ばれてる。お前もそう呼べ」
日に焼けた真っ黒な顔に真っ白な歯を覗かせて満面の笑みを浮かべ

ていた。新兵は型どおりの肯定の意を表す。
「おい！みんな！新顔だ！紹介するぜ」
先ほどの新兵の声量とは比べものにならない、という大きな声で軍曹が叫ぶと、射撃場から一斉に喧噪が消えた。
「新顔だってよ」
小銃もそのままに、一人の新兵に一斉に視線が集まった。
「オキーフ二等兵だ。俺らの隊で預かることになった。仲良くしてやれよ」
変わらない声量で軍曹は簡単に新兵を紹介する。
「また軍曹好みのカワイイ子だな」一人の兵士がからかい半分で含んだ小言。
「何か言ったか？」
「おい新米、気をつけろよ。ブルはお前みたいなのが好みなんだ」
ふとオキーフは握られたままの右手に違和感を感じた。全身から血の気が引く。
「マラーキー、お前、ヤキモチ焼いてるならじっくり相手してやるぞ」
「うぇぇおっかねえ」
軍曹は万力のような手をマラーキーと呼ばれた伍長に向けて威嚇した、おもしろ半分で迫ってくる軍曹から逃れるようにマラーキー伍長は射撃場から外れて丘陵の方に逃げ出していった。ブルも果てしなく追いかけてゆく。
「またか」
射撃訓練を中断したイタリア系が怪訝そうな顔で弁明した。
「ブルたちはいつもああやって遊んでるんだ。仲いいだろう」
「仲がいいというか……」
新兵は困惑した。ブルと同じく1等軍曹の階級章をつけた男は溜息混じりに続けた。
「俺はガルニアだ。3班を担当させてもらってる。ブルは2班、お前はしばらくブルの所だな。ケツには気をつけろよ。ブルは見境無

い」
「……本気ですか」
「冗談だ。まあ新兵でも誰にでもあんな調子なのは、奴の良いところかもしれないがな」
「はあ」気のない返事だった。先が思いやられる、といった顔だ。
「遊んでいるわけじゃないんだが。仕方ない。実際ここに来ていまでコレといった戦闘もないしな。ま、心配しなさんな。やるときはやる連中だ」
いくらか覚悟していたとはいえ、見渡す先任たちは一癖も二癖もありそうな連中ばかりだった。
「ここで立ち話も何だ。早速だがおまえの腕前を見せてもらおう」
ガルニアは含み笑いを隠そうともせず新兵にそう告げた。
「小隊長に会うよう申し付けられたのですが」
「なあに、しばらくしたら戻ってくるよ。荷物は適当にそのあたりにおいて……」
ガルニアの言葉が途切れる。何かを目で追っている、と気づいたオキーフは体をこわばらせた。

「Ｔｅｎ　ｈｕｔ！」

ガルニア一等軍曹からの気を付けの号令、その場全員が射撃場入り口に向かい敬礼した。
「楽にしろ。俺だけの時は敬礼は要らん」
中尉の階級章をつけたその士官は、そう言いながらもその場の空気を緊張させた。

「通達がある。全員直ちに第一演習場に集合。中隊編成が変わるぞ。……先任はどこに行った？」
「マラーキーと共に外れの丘陵に向かいました。すぐに戻ってきます」

「わかった。集合場所を伝えておけ」「Ｙｅｓ　Ｓｉｒ」ガルニアは手早く説明した。
「補充兵が来ていますが」
「オキーフ二等兵です。本日配属になりました」
新兵は素早く自己紹介を行う。
士官は少し表情を緩めると簡単に挨拶した。
「よく来たな。小隊長のウィンタースだ。お前も早速だが演習に参加してもらうぞ。みんなについて行け」
「Ｓｉｒ，Ｙｅｓ　Ｓｉｒ！」
小隊の面々は各々装備を手早くまとめると、足並みそろえるように簡易射撃訓練場を後にしていく。
「腕前は後で見せてもらうからな」
ガルニアは新兵にこっそりと耳打ちした後、同僚を引き連れるために丘陵へ走り出した。
新兵は下ろしたばかりの荷物を抱え直す。
「ガルニア軍曹は狙撃がうまいんだ。下手な腕を見せたら一晩こっそり絞られるぞ」
そう言ったのはオキーフと大して歳も離れていなさそうな上等兵だった。
今のガルニアの耳打ちが聞こえていたに違いない。
「ペルコンテだ。お前が来てくれたおかげで助かったよ」
何故助けたことになったのか、と首を傾げる。
「急ごう。中隊長のソベル大尉に目を付けられたらマズイ」
上等兵はたいした説明もしないまま、自分の装備だけを抱えて宿舎に走り去る。
遅れじと、オキーフは後を追いかけた。

第一演習場には中隊のほとんどの人間が集まっていた。射撃訓練場

で見た小隊の面々は既に整列している。遠くに走り去っていったはずのランドルマン軍曹とマラーキー伍長もいつの間にか並んでいた。
「急げ！」
中隊長の横に控えているウィンタースから檄が飛ぶ。
演習場は見渡す限りの砂地。２００人は並んでいるだろうか。
オキーフは改めて戦地に来たことを実感した。
ここからは見えないが、遠方よりヘリコプターのローター音が複数混じって響いてくる。
「総員、注目」
再び号令。隊列前面には中隊長である将校が構えていた。
「気をつけ！」間髪入れずソベルはあらん限りの声で語りはじめた。

「皆に通達する。本日午後より予定していた演習内容を変更する。予定では１０１機甲大隊との合同で戦車随伴訓練であったが、戦車の代わりに大隊から新型兵器が届くことになった。その実地評価を我が中隊が受け持つ」
先刻から続くローター音が大きくなるにつれ、隊員皆が、それこそ新型兵器であることを感じ取っていた。
「国防省が民間と共同で開発していた新しい概念の兵器だ。早速、皆に見せてやる」

１ｋｍほど先で、それは空中投棄されたかと思うと、周囲に砂煙をまき散らしてこちらに向かっきた。
（戦車の代わりって、戦車じゃねえの？）
誰かが呟いていた。
（戦車じゃねえよ。ＵＨ－２０が戦車２台もぶら下げて飛べるもんか）
（小さいぞ）
近づくにつれ、それは異様な姿をしている事に気づく。
高さは２ｍほど。装甲車にしては横幅が狭すぎる。さらに近づくと、

それは大雑把に人間の形をしていた。アルペンレーサーにも似た動きで、砂の海を滑ってくる。

Ｍ２３機動装甲服。甲冑とも呼べるそれは１９７０年代より国防高等研究計画局（ＤＡＲＰＡ）で起案された歩兵強化プラン「エクソスケルトン構想」による研究でようやく実用にこぎつけた物だ。まさにＳＦ映画の世界から生まれたような姿だった。

「各小隊に２機ずつ配備される。今後、訓練実戦を問わず常に随伴するから戦い方には慣れておけ」

歓喜の声が上がる。

「貴様らが好き勝手使っていいオモチャじゃない。扱いについてはウインタース中尉から説明がある」

６機の装甲服は隊列の前でゆっくり停止した。

――――

「しかし急な話です」とウィンタース。

降って湧いたような話だった。ソベルは困惑していた。

「先週、実地評価を行う予定だった２０３大隊がダーイクンディーで襲撃された。まさかこっちにお鉢が回ってくるとはな。いきなり新兵器を渡されて、使ってみろ、ということだ。面倒なことになった。」

「いい機会です。自分は１年前に実機をバージニアで見ました。大尉はその時の研修に参加されませんでしたか？」

ソベルは無言だった。

訓練教導士官として上官からの信頼は厚いが、その中身は教科書通りの対応が精一杯だった。

模擬戦闘訓練で応用が利かず、過去何度か失敗を繰り返していた。

部下の中には「地図も読めない中隊長」と陰口する者もいる。
「…誰かが運用しなきゃならんのですよ、大尉。専門の技術将校も来ます。我々で何とかしましょう」
「……わかった。では君が演習プランを練り直してくれ」
「私が、ですか」
今回のカビが生えそうな戦車随伴演習はソベルが発案した物だった。無限軌道が損傷した戦車を護衛しながら修理、再起動させるというありきたりの想定もだ。
「新兵器について多少なりとも知識を持っている将校は我が隊では君だけだ。そうだろう
「……Ｙｅｓ　Ｓｉｒ」
ウィンタースは情報端末から1年前手に入れた資料を引っ張り出し、当時使われていた運用マニュアルを広げた。
開発終盤は戦闘車両的な用途も想定されていたが、携行弾数が少ないことと航続距離が短いので実用にならない。当時は実用化はまだ先だと囁かれていた。
旅団本隊からつい先刻届いた新兵器に関する資料ファイルの存在を示すアイコンが端末内でＰＯＰした。
「中隊長権限が必要、機密書類です」
ソベルは自分のＩＤを端末に翳した。たちまち暗号化されたファイルが展開される。
いくら急だとはいえ、直接指揮を執る小隊長になぜ閲覧権限がないのか。ウインタースは憤りを感じた。いや、その憤りは率直なところ、目の前のこの無責任な中隊長が原因なのだ。
「読みます」と許可を求めると返事を待たず目を通しはじめた。
「最終的には燃料電池の小型化が成功したために室内戦でも使えるように軽量小型化されています。完全に歩兵運用の延長で使えるようになっているはずです」
「……それで」
「今までの展開訓練と同様の演習を提案します。ただし、まず最初

にこの装甲服を投入してから各部隊を展開します。その方が人的損害が少ない。それから実際に動いてみて、問題を洗い出してみましょう。まずは設計思想通り現物が動くかどうかを知ることです」
「いいだろう」
ウィンタースは必要な車両と装備を計算し、演習場の地図に次々と配置していった。
「それが終わったら全員演習場に集めろ。０９３０には現物が到着する。お披露目だ。」
「Ｙｅｓ　Ｓｉｒ」
そう言ったきり、ソベルは後は任せたと言わんばかりに部屋を後にした。
「……乗り手と打ち合わせもしなきゃならんのに……」
ウィンタースは一人呟いた。

トントン、と電算資料室の扉を叩く音。ほとんどソベル大尉の退室と入れ違いだ。
「どうぞ」
今度は何だと言わんばかりに、ウィンタースはぶっきらぼうに返事をする。
「失礼します」
入ってきたのは見たこともない航空機乗りのような戦闘服に身を包んだ、自分よりも年上と思われる兵士だった。
「こちらにいると伺ってきました。自分はカーウッド・リプトン特務曹長です」
ウィンタースは一瞬事態が飲み込めなかった。
「２０３大隊からの転向で、あなたの指揮下に入るＭ２３のオペレータです」
「ああ、話は、今、聞いたよ。」
自分から話を付けに行く手間が省けた、と口にするところを噤む。
４０近いであろう叩き上げの軍人。

自分のように、士官学校出たて―とは行かないまでも、まだ一度も実戦を経験したことのないヒヨッコと較べて、纏っている気迫が違う。ウィンタースは一目でそれを感じ取った。
「こういう部隊編成は始めてなんでな。私がリチャード・ウィンタース中尉だ。よろしく曹長。頼りにしてるぞ」
「ありがとうございます」
「戦闘経験は？」
「１６回であります。先週のダーイクンディーのも含めてですがね」
「Ｍ２３でか？」
「Ｎｅｇａｔｉｖｅ．先週は担ぎ出すヒマもありませんでした。昨年のカブール進行の時が一番忙しかったですかね」
見地にもよるが、この戦争は２０年以上も――――あの９１１テロ事件から――――続いていることになる。
未だに見つからない指導者。報復戦争だと言われて四半世紀近くになった今でも、停戦を挟みながらまだこの戦いを続けている。

「あなたには新兵器の運用について助言してもらう。できるな」
「Ａｆｆｉｒｍａｔｉｖｅ．もちろんです中尉殿」
「早速だ。午後の演習内容の変更についてだが、何機揃っている」
「午後には自分の搭乗機を含め、８機揃う予定です。現在２機、０９３０に６機」
「わかった。付帯の編成には各小隊２機になっているな」
「その通り」
「当然だが、我が隊は新兵器随伴訓練など行ったことはない。あなたには我々の隊になじんでもらう時間が必要だな」
「６ヶ月運用訓練してきましたが、現場の空気は忘れちゃいませんぜ」
まるで士官学校時代の教導軍曹よろしく、リプトンは上官に対して砕けた物言いをする。

「では現物が揃うならそれを踏まえて午後の演習方針を固めよう」
「中尉殿」
「？」
「まずは自分の隊にどんな人間がいるか、知りたいんですがね」
気が焦っていた。自分でもこういった仕事は抱え込みやすいと日頃から自重していたのに、またやってしまったと反省する。
「すまん、曹長。先にそうするべきだったな」
「現場の将校が下士官にむやみに謝罪しちゃいけませんぜ。示しがつかねえ」
ウィンタースは苦笑いするしかなかった。

／／　８／２３／２０２４　１１：３０

先頭を走るハンヴィーが砂煙を上げて急停止、
ボンネット付近から煙が上がった。
ウィンタースは、すかさず解放チャンネルを開く。
「円陣防御！２班は左舷、３班は右舷、リプトン、ウェブスター、前に出ろ！」
檄が飛ぶ。

後続のＥＦＶが停止したハンヴィーの側面につき、解放された後部ハッチから次々と兵士が飛び出していった。後続車両も続々と配置につく。
煙を噴いている車両の左右に２機の甲冑が鎮座した。足首を降ろし、パッシブモードで索敵中。リプトンの視界はステレオ赤外線温度変化表示モード。
息苦しい。リプトンは呻いた。
数刻後には、ハンヴィーを取り囲むように円陣が組まれつつあった。

「早いな」
煙の吹いたハンヴィーの中で、ソベルはストップウォッチを片手に呟く。
配置完了の合図が次々と各班から飛んでくる
「全隊配置完了、大尉」
「２０秒。もう少し改善の余地はあるな中尉」

ガムテープで留められた発煙筒からは、未だ煙が上がっている。

「文句は車両隊に言うべきか」
「Ｎｏ　Ｓｉｒ．３班の展開に手惑いました」

「結構」
３班を率いてるガルニアが部下を叱咤していた。
「もたついてる時間だけＲＰＧの１発や２発打ち込むチャンスを与えてるんだぞ。威力防御だって事を忘れるな。こっちが構えていれば向こうは下手に手出しできん」

「中尉、感あり、実際」
ウェブスターが唐突に割って入った。
「何だ？」
「距離約５０００、クラス５の熱源」
甲冑に搭載されている赤外線センサーが何かを捕らえたようだった。
「このあたりで演習している部隊が他に？」とソベル。
「Ｎｅｇａｔｉｖｅ．スケジュールにはありません大尉」
「現地人の事故かもしれんな」
ウィンタースは少し考えた。
「ウェブスター、他にクラス２熱源は？」
「人間らしき影は見あたりません。何か派手に燃えてますね」
スコープを片手にウィンタースは示された方角を覗く。

「キレイなもんだ」
砂漠のど真ん中で揮発性の燃料か何かを燃やしているような細い煙が上がっていた。
「偵察だな。リプトン、先頭に立て。ブル、ＥＦＶで後方から援護だ」
「Ｒｏｇｅｒ」「Ｙｅｓ、Ｓｉｒ」
「他の者はそのまま待機」
微バックで足首を畳むとリプトン機は静かに前進した。ブルの班をすばやく詰め込んだＥＦＶもそれに続く。
大隊本部にも一報を入れておく。
「ＨＱ、こちらＲｏｍｅｏ０１、聞こえますかどうぞ」

『…こちらＨＱ』
「シンク大佐に伝えてくれ。演習中に現地人のものと思われる事故発生、現在カラサスから南５０００、現在調査中、送れ」
『…こちらＨＱ…十分に注意し報告せよ。現地人とのトラブルは回避せよ。以上です』
「Ｒｏｇｅｒ　ｔｈａｔ．調査を続行する」

そうこうしているうちにリプトンは目標を正確に捉える距離に近づいたようだ。
『こちらＲｏｍｅｏ１１、中尉、車両火災です。人間はいません』
「車両？」
ソベルと目が合う。
『ロシア製の牽引車、キリル文字です』
「映像回せ」
「Ｒｏｇｅｒ　ｔｈａｔ．」
甲冑からのブロックノイズ混じりの映像がハンヴィーに搭載されている戦術端末に投影された。
「…何でしょう」
「レーダーか何かの電源車両だな。旧式の」ソベルは事もなげに答えた。
「発電機ありますね」
火災はどうやらその発電機付近にあるタンクから漏れている燃料に引火して起こっているようだった。それにしては不自然なところもある。
「車輪が片方はずれてるな。運搬できなくなって捨てていったのか？」
視線が降ろされた映像には、何本もの轍が南北方向に伸びていた。数にして約一個小隊分。
「この暑さだ。自然発火でもしたか」

今朝の偵察衛星報告は特に何も無かった。何者かが通ったとしたら午前中、演習前だ。
「我々の目と鼻の先で、敵対勢力が堂々と武器の運搬を行っていた、と考えても差し支えなさそうだな」
敵対勢力、か。とウィンタース。
「電源車、って事は、レーダーですかね」
「わからん。南には３０ｋｍほど先に村があったはずだ。今じゃ誰も住んでいないがね」
ソベルは思い返していた。
「映像をＨＱに送ります」
「そうしてくれ」
『こちらＲｏｍｅｏ２１、問題発生』
「どうしたブル」

緊張が走る。

『フーブラ伍長が倒れました。単に熱中症です』
「……すぐに引き返せ。ユージーン、処置を頼む」
内心、驚かすな、と言いたいところだった。
だが砂漠の熱中症は甘く見てはいけない、と衛生兵には繰り返し釘を刺されている。
大事をとって部下には後退を命じた。
「リプトン、お前も戻れ」
『Ｒｏｇｅｒ　ｔｈａｔ．』
演習用の装備ではこれ以上深追いは危険だ。
砂漠の外れの村に偵察部隊派遣の具申をしなければならない、ウィ

ンタースは戻ってからの算段を始めていた。

／／　８／２３／２０２４　１８：００

大隊本部、仮設プレハブの一室に作戦会議室と銘打った部屋がある。ウィンタースの部隊が帰ってからというもの、慌ただしい雰囲気に包まれていた。

一人の将校が一枚の写真を取り出す。

「朝、演習の前に撮影された、偵察衛星の画像です」

将校達が食い入るように見つめていた。

「真上からで解りづらいかもしれませんが、ダンプトラックと我が軍で使用しているＥＦＶです。しかし、この時間帯にこのコースを移動した部隊は記録にありません。アセトンの駐留部隊に問い合わせましたが南に移動した部隊は無いということです」

大隊本部から北に６０ｋｍ、人が住んでいる統治下の町の名だった。駐留３個中隊が交代で警備している。

「朝方交代要員を乗せたナイトストーカーズのヘリがこれらを目撃してますが、自軍のものと思って報告しなかったそうです」

写真には車両が７台。そのうち一台は幌をかぶせたダンプトラック、ＥＦＶ４台の内２台が一回り小さい真四角の車両を牽引しているように見えた。

「ＥＦＶが敵対勢力に奪取されていると？」シンク大佐の顔が曇る。

「現時点では不明です。偽装されているのかも知れません」

スピアーズ少尉は曖昧に答えざるを得なかった。

「この牽引されてる車両、発見された電源車両に見えませんか？中尉」

「確かに」

ウィンタースは情報端末を指さす。

「外装はロシア製の電源車両なのは間違いない」

照合確認はしてある。
「リプトン機のミッションログを解析しました。ケミカルアラート寸前でしたね」
「ケミカルアラート？」
「塩化アンモニウムの濃度です。燃えていたのはおそらく、ヒドラジンではないかと」
「ミサイルの燃料か」
「そうです。電源車は偽装だと思われます。ミサイルの燃料を運んでいたと考えるのが妥当でしょう」
「ではダンプトラックの積み荷は」
「アル・アッバス？中距離ミサイルなら上下に分解して積み込めてもおかしくありません。事前に目標位置が知れているなら、レーダー波誘導も不要です。ヴァーティカルブートなら発射台も簡素なもので済みます」
「こいつらが向かった南の町には何がある？」
「今は人が住んでいません。１年前の戦闘で無人の廃墟と化しました。以前は人口１０００人ぐらいの小さな町だったのですが、今は何も無いはずです」
スピアーズが代わりに答えた。
「そこに向かったとしたら何が目的か」
「ミサイル運搬仮説が正しければちょうどカブールが射程圏内に入りますね」
とウィンタース。
「それか」
「弾頭の中身が気になりますね」
「一発のミサイルなら通常弾頭だとは考えにくい」
将校達は皆口を噤んでしまった。
「…現時点での情報からでは埒があかんな。推測の域を出ない」
「偵察を出しましょう」
「明日はアセトン駐留の入れ替えだ。ソベル大尉、君の部隊は引き

継ぎ無しだったな。任せる」
「わかりました大佐」
ソベルはただ淡々と返事を返した。

―――

「中尉、どう思う」
会議室の帰り、ソベルは覇気のない声でウィンタースに問いかけた。
「偵察してみないと何とも言えません。所属不明のＥＦＶってだけで謎だらけです」
「そうだな。アセトン駐留の奴らが何か企んだのかも知れん」
「どういうことです？」
「湾岸戦争であったことなんだが、現地の部隊が作戦行動中に偶然、フセインの金塊をみつけてな。そいつを持ってトンズラしたことがあったそうだ」
ウィンタースはしばし開いた口が塞がらなかった。
「今回もそのたぐいの事件だと？」
「さあ。この戦争に意義を見いだしてる連中はそうそういない。目の前に自分の給料以上の旨い話が転がり込んでくりゃ、悪さを考えるかもしれんさ」
「はあ」
「ひょっとしたらシンク大佐殿もその可能性、薄々感じてるんじゃないか」
会議の後半、確かに投げやりな雰囲気ではあった。
「まあ、明日の偵察衛星報告まで詰めるところは詰めておくぞ。１６０航空連隊にも協力いただこう。ブリキのオモチャを運んでもらわんとな」
「現地人と遭遇したときに備えて通訳も必要です」

「？フーブラ伍長はどうした」
「熱中症がひどい状態で、明日の作戦までに回復するかわかりません」
「なるほど…大隊付きのリーブゴット伍長がいいだろう。引っ張ってこい」
「Ｒｏｇｅｒ　ｔｈａｔ．」
「中尉」
「…？はい」
少しためらいがちに、ソベルは言った。
「規律を重んじるのはいいが、適当に息を抜いておかないとヘバるぞ」
「…大尉、それは…」
鬼教導と言われたソベル大尉の言葉だとは思えなかった。
「明日０９００集合。ブリーフィングを行う。午後には出発だ」
それきり、ソベルはさっさと士官執務室に向かってしまった。

―――

「出撃ですか」
レタスを飲み込んだオキーフは声を荒げていた。
「焦るな。単に偵察だ。何も無いかも知れない。大事をとって一個小隊で向かうんだとよ」
ランドルマンは血気逸る部下を宥めるように言い放った。
「フーブラの代わりに大隊の通訳さんが来る。仲良くしろよ」
「通訳？」
「リーブゴット伍長だ。お前も会っただろう」

ああ、あの素っ気ない伍長殿か、とオキーフは思い出していた。
「戦闘経験は無いと仰ってましたが」
「俺だってねえよ」
やや不機嫌そうに答える。
「俺がココに配置されたのはカブールより後だからな。甲冑の曹長殿は二人とも経験してるらしい。バランス悪いよなぁ」
「実戦になれば念願かなったりですね」
「うれしそうに言うな。お前。人を撃ったことはあるのか？」
答えに詰まる。
「…ありません」
「だろ。訓練は飽きるほどやった。だが実戦で本当に人が撃てるかどうかなんてな。訓練の時とは全然違うんだ。民間人とも民兵ともつかん連中に銃口を向けてさ。後になって新聞屋どもが騒ぐんだ」
新兵は何も答えることができない。
「まあ、銃を手に取る兵士にゃ責任はないって事になってる。俺たちは交戦規定に沿って行動してりゃそれでいいんだ。揉め事が起こったならここに派遣させた上にでも文句言ってみるさ」
「穏やかじゃないな」
いつの間にか目の前の席に陣取ったウェブスター特務曹長が割って入る。
ランドルマンに負けるとも劣らない大柄な体格、がっつりと腰を下ろすと、山盛りになっているサラダにかぶりついていた。
「昔とは兵隊の仕事が変わったんだ。オマエらが危険を冒す必要はない。俺のケツにぴったりくっついてくればな」
「頼りにしてますぜ曹長」
「アレって、乗り心地とか、どうなんですか？」
オキーフは我慢できず尋ねてみた。
「なんだ。興味あるのか少年」
「はい」
「俺んとこのガキそっくりの目だな」

言ってる意味がわかりかねた。
「ああ、故郷に息子がいてな。こういったオモチャが大好きなんだ」
機密事項は話せないとしながらウェブスターは語り始めた。
エクソスケルトンの歴史、開発経緯、今まで軍が行ってきた作戦での兵士の損耗率、極限状態での戦場心理学にまで話が及んできた。
「…研究し始めてたころは単にボディーアーマーの延長だったんだ。それが２０００年入った頃に装備運搬するためにパワーアシストモーターやらバッテリーやら積み始めてね。今じゃ半分戦車みたいなもんだ」
「普通の小銃弾じゃまったく歯が立たないんでしょう」
「逆に、対戦車兵装で狙われるようになるな。下手な装甲車よりマトが小さいから、誘導ミサイルの餌食になるかもしれない。訓練の内容にゃ、至近距離でＲＰＧ避けるのもあったぞ。当たれば一撃でお陀仏だ。それでも乗りたいか？」
「ＲＰＧの危険性は徒歩でも同じですよ。面白そうです」
「…わかった。作戦には無理だが今度訓練の時に乗せてやるよ」
「本当ですか？」
意外な言葉が聞けてオキーフは舞い上がった。
「…いいんですかい曹長」
「かまわんさ。今後配備される数が増えてくるんだ。それで兵士の数も少なくて済むようになる。小僧みたいな兵士でも、今までの分隊以上の働きを一人でできるようになるかもな。軍曹、君みたいな昔ながらの軍人ってのは次の仕事考えておいた方がいいかもしれんぞ」
笑いながらウェブスター曹長はトレイの食材を次々に平らげてゆく。
「そりゃねえです」
「せいぜい時代に取り残されないようにな。軍曹。俺は今から隊長と話がある。明日の輸送の段取りだ。距離があるから空輸するんだと」
「空輸ですか」

「あの乱暴なタンデム降下、俺はいいんだが、リプトンの奴がまだ苦手でな」
「はあ」
「１０回の訓練で模擬機１台つぶしやがった。転んだら起こしてやってくれ」
ウェブスターは最後一頻り豪快に笑うと、
「じゃ、片付けよろしく、二等兵」
「…Ｙｅｓ、Ｓｉｒ」
後から来たのに自分より食うのが早い。
あのランドルマンが「負けた」顔をしている。
「…曹長殿にはかなわねえ」
「我々は失業ですかね。軍曹殿」
「おめえはまだ若いからいいよ。俺みたいなロートルはそれこそ時代遅れのお荷物になっちまうのかもな。学もねえ。曹長殿はああ見えて英国のケンブリッジに行ってたんだとよ。」
「へぇ」
「実質、士官待遇だ。本人はそう言うそぶり一切見せないけどな」
そういった横顔は少し寂しげだった。

／／　８／２４／２０２４　９：００

一夜明けた大隊本部のハンガー。
第３小隊の面々がずらりと並ぶ。構成員５２名、歩兵小隊としては標準的な構成。
しかし、今回の任務から、Ｍ２３を随伴しての実戦が想定されていた。

「今朝の偵察衛星写真から、未確認目標は南の廃墟に止まっていることがわかった。戦力は現在のところ不明、車両の台数と移動の痕跡から最大で一個小隊規模だと思われる」
アナログ地図の貼り付けられた昔ながらのホワイトボードの前で、ウィンタースは説明を続ける。
「Ｍ２３の二人は１６０連隊のナイトレイブンで現地へ。１４３０、タンデム降下、先行して中央広場に入れ。歩兵隊が来るまでの間、搭載センサーで目標人員をできるだけ補足せよ。特にこの駐車車両付近を入念にだ」
「Ｒｏｇｅｒ　ｔｈａｔ」
「君たち二人は万が一の場合の陽動を兼ねている。最悪の場合、攻撃があるかも知れん。心得ておけ」
先陣を任される二人はそれぞれ神妙な面持ちだった。
「歩兵３分隊は５６連隊のＥＦＶに分乗、リプトン、ウェブスターからの報告があるまで広場東側のホテル跡地脇、小高い丘の麓で待機。ここだ。市街地からは陰になっていて直接見渡せない。安全なはずだ」
へいへい、とランドルマンがふてくされた顔で頷く。歩兵分隊が主役でないことは明らかだった。
「Ｍ２３市街地突入時に反応がなかった場合はブル、君たちの出番だ。ホテル跡地から捜索に入る。Ｍ２３では建物に入れないかも知

れない」
スピアーズから補足が入る。
「1年前の戦闘による被害で、建物にはM23の重量を支えるだけの強度が不足してかもしれません。階段などを使うとき十分に注意してください。M23は転倒するとワイヤアンカーを使えない場所では自力で立て直すのが困難になります」
ランドルマンが空を向く。
「その時は俺らが上がって調べればいいんですね」
「その通りだ」
翻って、ウィンタースは引き延ばされた衛星写真の一部分を指した。
「今回、相手の正体もさることながら、最優先の偵察目標はこれだ」
例のダンプトラックの影。
「昨日の演習で遭遇したロシア製の電源車両にはタンク部にミサイルの燃料が積まれていた事がわかっている。このダンプの積み荷が弾道ミサイルである可能性は否定できない」
ハンガー内がざわめく。
「ミサイルの弾頭種類は不明、NBC兵器の可能性も十分ある」
今回の偵察任務を半ば楽観していた兵士達にも動揺が走る。
ランドルマンも同様だった。
（最悪、核ミサイル？）（防護服が要るんじゃあ）
「静かにせんか」
ガルニアがその場を静めてくれた。目線で続きを促す。
「あくまで可能性だ。それ以外に陸戦部隊がヒドラジンを運搬する例がないからな。歩兵分隊が待機する理由はそれもある。万が一の場合でもEFVの中は安全だ」
核攻撃が防げるわけではないが、BC兵器であれば何とかなる。そう踏んでいた。
「たかが偵察だと思うな。常に最悪の状況を想定しろ。ハンヴィーに搭乗する1分隊分のNBC防護服を用意してある。ソベル大尉は上空から指揮を執る。現在160と打ち合わせ中だ。その他、質問

は無いか」
奥の方で小さな声が上がる。リーブゴットだった。
「自分はどうすればいいんですか」
「伍長、君には捕虜が出た場合の通訳をお願いする。私と行動を共にしろ」
「…わかりました」
消え入りそうな声だった。
（野郎、大丈夫なのか？）とブル。
（事務室からほとんど出なかった人ですよ。仕方ないかも）
オキーフは小声でそう答えるしかなかった。
「他に質問がなければ、一旦解散する。各自準備に取りかかれ」
一斉に隊員達が動き出す。

特務曹長二人は１６０連隊付きナイトレイブン輸送ヘリの格納庫に向かいＭ２３の最終調整に入った。
既に燃料電池カートリッジは交換され、Ｍ２４９の給弾ベルトをバックパックにロードする。いつもの訓練用模擬弾ではなく、実弾である。
「ＦＣＳのソフトウェア更新、先週だったよな」
「？リプトン、どうかしたのか」
「いや。何でもない」
ウェブスターはこの歴戦のベテランに全幅の信頼を寄せてはいたが、まだ古いタイプの軍人のクセが残っているのが気がかりだった。
Ｍ２３訓練前、「電気機械は得意ではない」と言っていたことを思い出した。
ほとんどの勤務時間をＭ２３のオペレーションに費やしながらも、

一方ではまだ小銃の手入れを一日たりとも怠らないほど筋金入りの前線兵士だった。
「リプトン、俺も見習った方がいいか？」
操縦席脇に埋め込まれた小口径短機関銃を取り出して見せた。
「お前さんは俺より機械の扱いが上手い。そんなものに頼らなくてもいいだろう」
「常に最悪の状況を想定しろ、と隊長殿は言ってたぞ」
「なんだかんだ言って、甲冑の中は安全だ。家族のためにも外に出て戦おうなんて気は起こすなよ」
「やめろい、あんたじゃあるまいし。まだ戦闘があるとも決まってないしな」
メインシステムの起動スイッチを入れたウェブスターは、目の前のＬＣＤを確認しながらテンポよくミッション情報を入力していく。
「自動チェック、ＦＣＳ、ＩＲＣＳ・シンクロナイズ、弾数入力終了。ＧＰＳシンクロ、ＦＭＳ各ステッピングモータ、ホイールモータ問題なし。電圧正常。ＧＰＳのコンパス微調整が遅いな」
「砂漠だから仕方ない。楽しそうだな相変わらず」
「ま、現地でもう一度チェックする。よろしく頼むぜ、相棒」
「どっちに言ってるんだ」
さも当たり前と言わんばかりにウェブスターは返した。
「コイツとお前さ」

／／　８／２４／２０２４　１４：４０

その町は、既に閑散とした廃墟だった。
広場の東側に朽ちたホテルがある以外、建物という建物はほぼ完全に崩壊していた。
砂丘と高さ５ｍほどの切り立った、岩肌を露わにした小高い山以外に人が大挙して隠れられそうな場所もない。
町の中で唯一の建物と呼べるそのホテルは、戦闘の後ずいぶんと長い間放置されていたらしく、あちこち崩れかかった煉瓦が顔を覗かせていた。２階から上は壁面が完全に崩れており、鉄骨の柱だけが閑散とした林のようにそそり立っていた。１階部分はまだ大部分の壁が残っているものの、所々に大穴が開いており、風雨を凌げるかどうかも怪しいものだった。ぼろぼろになった漆喰が煉瓦にかろうじて張り付いている。
クライヤホイールの砂塵も控えめに、ゆっくりと巡航速度で進入した二機の特務曹長を納めた甲冑は、ホテル駐車場の外れに止めてある車両群に用心深く近づいていった。

やけに静かだった。
電動モーター駆動のホイールが砂を踏む音だけ、妙に響いていた。
『Ｒｏｍｅｏ１１よりＲｏｍｅｏＰａｐａへ。ＥＦＶ４台とダンプトラックを確認。ＩＲＣＳから対人対車両熱源反応無し。エンジン動作した形跡見あたず』
念のために後部ハッチのイメージをＦＣＳでロックしておく。
機銃と連動したレーザー測距器と赤外線カメラを組み合わせたシステムは、その銃口を正確に車両後部に定めていた。ＥＦＶの４台は、ともハッチが開いたままになっており、赤外線カメラのからの情報では中で人が動いている気配はない。空気が淀んでいる。

廃墟の外れ、砂丘の麓でブロックノイズ混じりのカメラ映像を端末で確認しながら、ウィンタースは慎重に指示を出す。
「ウェブスター、車両側面の部隊コードを確認しろ。ＨＱに問い合わせる」
『Ｒｏｇｅｒ　ｔｈａｔ』
確かに陸軍で使用しているＥＦＶだった。張りぼての偽装などではない。隠蔽されていると思われた車両側面の部隊コードペイントも何ら細工された痕跡はなかった。
「ＨＱ、こちらＲｏｍｅｏ０１、部隊コード確認、照合願う」
『ＨＱ了解。照合作業に入る。引き続き警戒せよ』
「ウェブスター、ダンプの荷台は見えるか？」
『Ａｆｆｉｒｍａｔｉｖｅ．大型の円筒形の物体が二つ。片方は、どう見てもロケットモーターのノズルですな』
なんてこった、とウインタースは頭を抱えた。あまり当たって欲しくない予想が当たったようだ。ウェブスター機のカメラから送られてくる映像は、以前テレビにも紹介された中距離弾道弾の一部だった。
「ダンプトラックの運転席に人はいるか？」
「Ｎｅｇａｔｉｖｅ．人っ子一人いません。子供がかくれんぼでもしてない限りは」
人の気配がない。ウィンタースは奇妙な感覚に苛まれた。少なくとも駐車場に駐まっているこれらの車両を運転した人間がいるはずだった。
ウィンタースは端末のモニタから目を離し、先ほど装填した小銃を手に取り、ヘッドセットの固定具合を確かめながら続けた。
「リプトン、ホテルを探索するぞ。こちらに来て歩兵隊を護衛しろ。ウェブスターはミサイル周辺を引き続き警戒。ブル、ガルニア、出番だ。２班は内部を探索、その間３班はホテル周辺を警戒」
待ってましたとばかり、狭いＥＦＶの後部ハッチから矢継ぎ早に

兵士が飛び出した。
「Ｍｏｖｅ！Ｍｏｖｅ！Ｍｏｖｅ！」
先任軍曹が訓練の時と同じように囃し立てる。
『Ｒｏｍｅｏ０１、こちらＨＱ、所属部隊判明。１年前のカブール戦闘で損失車両として処理された第２３レンジャー大隊のものです。データ上、その車両は存在しないはずです』
「レンジャー？」
戦闘中、すべての兵器が正しく運用管理できる状況であるとは限らない。行方不明になる車両や航空機も枚挙に暇がない。その中でもとりわけ厄介なのが敵対勢力に鹵獲された場合だ。先のカブール戦闘でとあるレンジャー一個中隊が全滅の憂き目にあった事を思い出したウィンタースは、さらに思考を混乱させた。
なぜ、全滅したレンジャーの車両がここにある…？
「中尉！」
ガルニアが今か今かと待ち構えていた。我に返ったウインタースは気を取り直して目の前の兵士たちを一望した。
「待ち伏せがあると思え。リプトン機を先頭に立たせる。張り付いて離れるな」
「パンツみたいにくっつかせときやすぜ」
ホテル正面にたどり着いたリプトン機の外部スピーカーから下品な言葉が流れる。
低いモーター音とともに甲冑の足首が下ろされ、直立状態となる。正面は装甲車並みの４０ｍｍのアルミ装甲板、ちょっとやそっとの攻撃ではビクともしない。こういった作戦にはありがたい存在だった。
「くれぐれも床の強度に注意してください、曹長」
小隊長の横で小脇にカービン銃と携帯端末を抱えたスピアーズ少尉は念のための確認と忠告を繰り返した。
「さぁ野郎ども、行くぞ！」
ランドルマンが大声で檄を飛ばした。

全高２．３ｍの甲冑はまだ煉瓦造りの壁にボロボロになった木製の扉が辛うじてぶら下がっているホテルの入り口に堂々と乗り入れた。頭部の複合センサーがフロントホールを警戒する。ランドルマンはその後を部下とともにゆっくりと付いていく。

「クラス２熱源なし…」

ホールは外と違って風がほとんどないため、足跡が発見できるかと期待していたがその目論見は外れたようだ。予想以上に隙間風が強い。うっすらとつもった砂が、なめらかな曲線を描いている。その砂の曲線は今観ている目の前でも隙間風によって蠢いていた。

「まずは地下からだな」

ホールの奥、朽ちた２階行きの吹き抜け階段の底に、まだ原型を止めている地下行きの階段があった。

「音声解析」

甲冑は鎧であるだけでなく、人間の目や耳、鼻の延長である。可視光から赤外線領域までのダイナミックレンジを持ったコンポジションカメラ、指向性集音装置、そして化学兵器検出装置。戦場で想定されるあらゆる危険を事前に察知し、先制して対処しなければならない。

階段から地下への視線の先は人間の目にはほとんど何も映らない暗闇だ。しかし光量増幅でリプトンにはその暗闇の中が手に取るようにわかる。後に続くランドルマンたちも、事前に用意していた暗視装置のスコープをバイザーから下ろし、暗闇に備える。

「こちらＲｏｍｅｏ１１、地下に潜ります」

どす、どす、と重たい足音が繰り返される。階段の強度は１トンを超える重量に耐えているようだ。足跡には細かく砕けたコンクリートが散らばった。

階段を下りた突き当たりには倉庫か厨房にあるようなステンレス製の扉があった。その取っ手には二回りほどまだ新しい細手のチェー

ンが巻かれ、ぴったりと閉ざされていた。
ランドルマンが止まれの合図を手で送る。ただでさえ注意深い足音が一斉にかき消えた。
リプトンは音声解析グラフを凝視していた。風音に混じって、かすかに別の音が混ざっている。この扉の奥からだ。
人の声にも聞こえる。
リプトンは操縦桿から離した手で、後続のランドルマンに突入する旨を伝える。これぐらいの扉なら1トンもあるこの機体で簡単にぶち破れるだろう。
ランドルマンはリプトンの合図に頷くと、部下に壁際に寄るよう合図し、自身もセレクタを3点バーストにした銃口を扉に向けて待機した。

がごん！

リプトンの機体は肩から扉に突進し、鎖が軽く千切れ飛ぶ。はたして扉は簡単に破られた。真っ暗闇の中、クラス2熱源、多数、しかし、リプトンはそれが何なのかすぐさま理解できなかった。

「子供…？」

嗚咽。泣き声。投光器をつけると、床一面に見窄らしい姿の子供、子供、子供。座り込んでいる者、横になったまま動かない者、立ち上がって大声で泣いている者、様々だった。地下厨房だと思われる10メートル四方の広い部屋には、かつて厨房だった頃の残骸に混じって、大勢の子供達が幽閉されていた。

「Ｒｏｍｅｏ１１よりＲｏｍｅｏＰａｐａへ…子供です、たくさんの子供が…」
『状態を確認しろ、ユージーンと一緒にそちらに向かう。何人だ？』

「ざっと、２０人は…います」
通信を聞いていたランドルマンは、ふと、その声が震えていることに気づいた。
「曹長、どうかしましたか」
小銃の代わりにマグライトを手にした軍曹は、倒れている子供に駆け寄り、健康状態を確認しながら尋ねた。
「いや、なんでもない。それより、子供たちの方はどうだ？」
「衰弱してますね。何日も食べていないようです」
「こちらＲｏｍｅｏ１１、糧食を持ってきてください。栄養失調状態です」
『わかった、ユージーンが指示を出す。それまで危篤者がいないか全員調べろ』
ランドルマンはバックパックからレーションの梱包を取り出し、ビスケットを探し出した。
倒れていた子供は、それを受け取ると、親の敵でもあるかのように貪った。
ランドルマンの部下たちも次々とバックパックを下ろし、レーションの包みを開け始めた。

―――

「子供ですか？」
とスピアーズ。ウインタースも憤りを隠せなかった。
「…こんな所に子供を放り込んで、一体何を考えているんだ」
まったく訳がわからない。ミサイルと一緒に子供を運んだ？一体何のために？
ＥＦＶに備えてある非常用糧食に手をかけようとすると、衛生兵であるユージーン軍曹がそれを遮った。

「中尉、食料ですが、今は与えないでください。まずは彼らを運び出しましょう。栄養失調状態で急激に食物を与えすぎるとショック状態になる場合があります」
「わかった。とにかく運びだそう。ガルニア！」
ホテル周囲を部下とともに警戒していた軍曹は、すぐさま小隊長の元に走った。
「手伝ってくれ、中に２０人ほど子供がいる。運び出して基地まで送るぞ」
「わかりました」
軍曹は一瞬事情が飲み込めなかったようだが、素直にそう返事すると自分の部下に集合するよう合図を送る。
「リーブゴット！伍長！通訳がいる、俺に付いてこい。ＰａｐａよりＲｏｍｅｏ１２、警戒人数が減るがしばらくここでの指揮をとれ。自分は子供の救出に向かう」
『了解《Ｒｏｇｅｒ　ｔｈａｔ．》』
その返事を待たず、ウィンタースはユージーン、ガルニアと数名の部下を連れホテルの地下室に向かって駆けだした。
薄暗い階段を下りると大勢の子供が啜り泣く声が聞こえる。
「ブル！ランドルマン軍曹！」
「中尉、昏睡状態の子供が2名ほど、先に運び出してやってください」
「ユージーン、看てやれ」
マグライトを片手に無言で頷くと、ユージーンは倒れてまったく動かない子供を抱きかかえた。まだ十歳にも満たないだろう。瞼をこじ開け光を当てると虹彩が動く。まだ死んではいない。
「リーブゴット、事情を説明できそうな子供がいないか聞いてみろ」
それぞれが子供を抱きかかえ外に向かう。
ウインタースは目の前でぐったりと倒れている5歳ほどの子供を脇に抱えた。
その時だった。

大音響と共にウィンタースは不意に意識を失った。

／／　８／２４／２０２４　１４：５５

「接敵！《Ｉｎｃｏｍｉｎｇ！》」

誰かが叫んだ。

続けて大きな爆発音。ヘッドマウントディスプレイ《ＨＭＤ》に表示されているはずの風景は文字通り砂嵐に見舞われていた。

それが、目の前の建築物が崩壊した土煙だと気付くのに数秒の時間を要した。

ウェブスターは機体をすぐさま振り向かせる。二百メートルほど先の瓦礫の山に、発射済みの対戦車擲弾《ＲＰＧ》砲身を構えた人影がふたつ。

「接敵！《Ｉｎｃｏｍｉｎｇ！》」

ウェブスターは自身が対戦車擲弾《ＲＰＧ》の攻撃に晒された事を悟った。

その人影は、すぐさまその場を離れようと走り出したが、既にその姿は機体の火器管制装置《ＦＣＳ》で捉えていた。躊躇いもなくコントロールスティックの引き金を引く。

５．５６ｍｍの鉛弾は、いとも簡単に、わずか数発で、その人影を薙ぎ払った。

「各自散開！固まっていたらやられるぞ！」

外部スピーカが壊れんばかりに響きあがった。前面装甲板に小銃弾の火花が散る。まるで空き缶をオモチャにでもしているような跳弾音が次々と戦慄(わなな)いた。

「Ｒｏｍｅｏ１２よりＲｏｍｅｏＰａｐａ、―現在襲撃を受けています！《Ｉｎｃｏｍｉｎｇ Ｅｎｅｍｙ》」

デジタル無線機からの応答は皆無。放置されているＥＦＶ―の陰に隠れながら、頭部複合センサー《ＴＡＤＳ》で確認すると、今し

方そこに佇んでいたこの街唯一の建築物が、見る影もなく崩壊していた。
　ウェブスターは土煙が晴れた地表に、ボロ切れの固まりが転がっていることに気付く。それは、かつて人間だったものの上半身だった。おそらくは至近距離でＲＰＧの爆風に晒されたのだろう、顔はバーベキューであぶったように肉汁を滴らせ、内臓が申し訳程度にはみ出ていた。こちらに向かって何かを呟いたような口腔は、そのままの形で動かなくなっていた。

「…衛生兵《Ｍｅｄｉｃ》！ユージーン！」
　解放回線《ＯｐｅｎＣｈａｎｎｅｌ》の無線に返事は返ってこない。
「Ｒｏｍｅｏ１２よりＲｏｍｅｏ３１、ガルニア軍曹！状況を報告しろ！」
　唯一建物に侵入しなかった第三班の状況を確認する。
　目の前に横たわっているこの友軍の死体もガルニア軍曹の部下のはず。その他の人員も散り散りになってそこかしこで応戦していた。
「こちらＲｏｍｅｏ３１」
　ようやく無線が返ってくる。
「第三班は各個応戦中、各員の状況はつかめていません！」

　敵の典型的な扇形集中砲撃陣形に足止めを食らっている形だ。その場を下手に動こうものなら、一瞬でヘルメットごと頭を持っていかれそうな勢いだった。
　ホテルを取り囲む瓦礫の到る場所から、止めどなく硝煙が散っている。
「クソッ《Ｄａｍｎ》！今の今まで待ち伏せていたって事か！？」
　ウェブスターは楽観視しすぎていた自分を呪った。相手は、わざわざ人員が少なくなる頃合いを見計らっていたのだ。地下室に誘い

込み、建物ごと崩落させるという暴挙に出たのだ。
ウィンタース小隊長は？
リプトン曹長は？
発見された子供達は？
考えている暇はない。今は目の前の脅威を取り除くだけだ。
このＭ２３機動装甲服《Ｅｘｏｓｋｅｌｅｔｏｎ》なら朝飯前だ。

脚部クライヤホイール起動、独特の電気モーター音と共に、ＥＦＶの陰から飛び出す。
装備重量２トン近くの甲冑が威烈な砂塵を巻き上げ、砂の海に躍り出す。
火器管制装置《ＦＣＳ》は正常、周囲の熱源と飛来する弾丸の衝撃波パターンから発射位置を瞬時に弾（はじ）き出す。廃墟の瓦礫、そこかしこに展開されている二人編成《ｅｌｅｍｅｎｔ》が八つ、どうやら寄せ集めの民兵ではなく、多少は訓練された兵隊のようだ。
ＦＣＳによってグルーピングされた標的に、次々とロック、機銃掃射を繰り返す。甲冑に内蔵されたコンピュータは、ほぼ正確無比に、機動装甲服用に調整されたＭ２４９（minimi）汎用機関銃をコントロールする。人が携行するにはかなり嵩張（かさば）るこの機銃も、この甲冑が扱えばまるでピストルのように軽快だ。標的に向けられた機銃をよそに、頭部《ＴＡＤＳ》のレーザー測距器《ｄｅｓｉｇｎａｔｏｒ》とステレオカメラは次の目標への正確な距離と方向を探し出す。一見すれば、まるで出鱈目に機銃を撃ちまくっているようにも見える。
その実、一連の動作は、まるで無駄が無かった。
５．５６ｍｍ機銃が掃き出す空薬莢とベルトリングで、ホイールの轍が彩られた。

ＨＭＤの標的トークンには、ひとつ、ふたつと、処理済みが点灯する。
甲冑越しでも、鉛弾をばらまく機銃の振動が伝わってくる。

左脚部のクライヤホイールを逆転、急旋回する。
最後の編成《ｅｌｅｍｅｎｔ》を薙ぎ払った瞬間、ウェブスターは信じがたい光景を見た。
「…子供…！」
最後に自分が薙ぎ払った、兵士の姿。弾丸は左側頭部に命中し、反対側に脳漿を飛び散らせている。なぜか、笑っているように見えるその顔。
今年十歳になる自分の息子の笑顔が重なった。
「何故？！」
砂煙が晴れ上がる中、次第にその全貌が明らかになる。
打ち倒した者、その悉くが、子供。
ある者は側頭部の皮膚ごと耳が千切れ飛び、ある者は下顎を右から左に弾が貫通し、内出血で舌がありえない大きさに膨れあがっていた。ある者は頭蓋骨が陥没し、左眼球が露出していた。自分の行った正確無比な攻撃は、彼らを例外なくこの世から消し去っていた。
「あああああああああああ！」
コンピュータゲームのように命を奪われた子供達。だが、それは容赦のない現実だった。

／／　８／２４／２０２４　１５：００

暗闇の中、オキーフは自身の身に起こった出来事を必死に理解しようとしていた。左肩に激痛が走っている。頬を流れる液体は、自分の血液のようだ。ヘルメットの隙間から、ぽたり、と滴が落ちた。興奮状態で、頭部に負っているであろう怪我の具合が分からない。先ほどの爆音で、耳の調子がおかしい。

「ランドルマン軍曹！」

あちこちで、呻き声が聞こえてくる。建物に侵入した友軍はどうなった？

みんな、下敷きになってしまったのか。

幸い、足に怪我はないようだ。頭の上に被さっている瓦礫の山を、必死に持ち上げる。乾いた木片や砕け散った煉瓦の破片が、バラバラと落ちてきた。ようやく、僅かな光が差し込んでくる。

そして、自身の目の前の惨劇に、戦慄する。

死体があった。本来頭部あるべき所に巨大なコンクリートブロックが。その周囲には、砕け散ったヘルメットの破片だけが飛散していた。自分が助け出そうとした少年は、脇腹から大量の血を流して絶命していた。

また多数の友軍は生きているようだが、自分と同じように立ち上がって動いている者がいない。

「ウィンタース小隊長！、リプトン曹長！、誰か！」

大声で泣き叫んだ。

「…落ち着け、新米…」

ようやく聞こえたその声は、倒壊した壁に寄りかかって座ってい

るガルニア軍曹だった。無線機を片手に、自分の右足を瓦礫の中から引っ張り出そうとしていた。脛のあたりからズタズタになり、どす黒い血の汚れがこびり付いていた。
「…他に動ける者を探せ…まだ生きてる奴がいる。モタモタしてたら、助かる者も助からないぞ…」
「了解…しました」

倒れた柱木の脇から、まだ比較的元気のいい声が響いてきた。ようやく、耳が慣れてきたらしい。
もう一人、立ち上がっている兵士がいた。見覚えのある顔だ。
「っか、惚けてるんじゃねえぞ、新米、一緒にこの柱どけるぞ」
マラーキー伍長だった。見たところ、どこにも怪我をしている様子はなかった。
「…あとで、怪我の具合、見てもらえ。今は友軍の救出が先だ」
「Ｙｅｓ　Ｓｉｒ！」
二人がかりで、柱の木を持ち上げる。オキーフは、片腕しか使えない自分を恨めしいと思った。
「（おい、早く助けてくれ、腹が、腹が変なんだよ！）」
「泣きわめくな、今助ける」
伍長が怒鳴り散らす。
比較的軽傷の者達が、次々と起き上がってくる。
柱木に支えられていた煉瓦造りの壁が、バラバラに砕けた。
「おい、見てくれ、俺はどうなってる？」
叫んでいたのはペルコンテだった。
野戦服の脇腹の部分がすり切れて、腹から血がにじんでいたが、たいしたことはなさそうだ。
「バカ、それぐらいでピーピーわめくんじゃねえ」
二等兵の下には、恐怖で縮こまっている子供の姿があった。とっさに庇ったのだろう。どこにも怪我をしている様子はなかった。
「ほれ、次行くぞ。ペルコンテ、お前は子供を外に運び出せ、さっ

さとしろ」

オキーフは辺りを見回した。立ち上がった友軍のそれぞれが、救出作業を行っている。まだ瓦礫に挟まれて動けない者を見つけた。

「ランドルマン軍曹！」

軍曹の脇で、泣いている子供がいた。彼もまた、軍曹に助けられたのだろう。軍曹の腕をつかんで引っ張り出そうとしているが、その巨体はビクともしなかった。胸から下が完全に埋まっていた。

「…新米、俺はまだ大丈夫だ。他の奴を優先しろ」

その顔は蒼白だった。口から泡の混ざった血を吐いて、呼吸音も正常には聞こえなかった。軍曹の上に覆い被さっているコンクリートは、鉄筋が幾重にも伸びて、そのうち何本かは、彼の体を貫通していた。

「何言ってるんですか、軍曹、じっとしててください」

「…俺みたいなロートルより、…救える友軍がもっといるだろ…」

「軍曹！」

「…分隊長命令だ！早く行け！」

かつて踊り場の階段であった場所に、一人の兵士が佇んでいた。目の前の惨劇が、一体何によるものか、理解できないでいた。

「リーブゴット！そこで何をしている、早く手伝え！お前も前線兵士だろ！」

マラーキーが負傷した兵士に肩を貸しながら怒鳴り散らした。

「伍長、小隊長が見つかりません」

「あとでいい、救出が先だって行ってるだろ？それよりユージーン軍曹を捜せ、衛生兵！」

鉄柱で右腕を圧壊させられた兵士が、ショック状態で絶命していた。
その脇で、オキーフはどす黒い血を流して棒立ちになっている機動装甲服を見つけた。
オイルが漏れているわけではない。鉄柱の崩壊により装甲服の左肩は完全に崩壊し、搭乗者の左腕だったものが、胸面装甲の脇からはみ出てぶら下がっていた。
「リプトン曹長…？」
機体から流れ出る血の量が、彼の運命を物語っていた。
＞i３５６２―５８７＜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1038j/

TinplateKinght

2010年10月12日02時09分発行